

# 外来 HIV 感染症診療での抗 HIV 薬の開始，変更時における 薬剤師介入が患者へもたらす効果に関するアンケート調査

矢倉 裕輝<sup>†</sup> 大石 裕樹<sup>1)</sup> 森本 清香<sup>1)</sup> 富島 公介  
櫛田 宏幸<sup>2)</sup> 吉野 宗宏<sup>3)</sup> 佐光 留美 土井 敏行  
林 稔展<sup>1)</sup> 山脇 一浩<sup>1)</sup> 西野 隆<sup>1)</sup> 山崎 邦夫

第70回国立病院総合医学会  
(平成28年11月11日 於 沖縄)

IRYO Vol. 72 No. 6 (282-286) 2018

## 要旨

Human immunodeficiency virus (HIV) 感染症に対する外来チーム医療において、薬剤師が行う服薬支援の目的は、薬物療法の効果をより確実に、かつ安全性の確保を図るために、患者へ服薬に関する適切な指導・助言を行うことである。中でも、重要な情報提供項目および薬剤間相互作用の確認事項の多い、抗 HIV 薬の投与開始および変更前後に面談を行うことが重要であると考えられる。今回、抗 HIV 薬の開始時および変更前後における薬剤師の介入が、患者の抗レトロウイルス療法 (Anti-Retroviral Therapy: ART) およびチーム医療に対する意識と服薬アドヒアランスの向上に寄与することを明らかにすることを目的としてアンケート調査を行った。

アンケート配布枚数122枚、回収枚数は120枚であった (回収率98.4%)。薬剤師との面談について、「大変役に立った」は68例 (57%)、「役に立った」は44例 (36%) であった。役立った説明内容については、初回症例では「服薬の必要性」が最も多く、次いで「飲み忘れと耐性獲得」および「飲み忘れた時の対応」が続いた。変更症例では「変更前の薬剤との違い」が最も多く、次いで「副作用」が続いた。

薬剤師へ行いたい質問事項については、副作用が最も多く、初回例は79%、変更例は88%を占め、次いで「相互作用」が続いた。薬剤師との面談による診療全体への変化については、「服薬に対する不安が軽くなった」が最も多く、「医師に副作用や相互作用に関する質問をすることが減った」が続いた。

本調査結果から、外来 HIV 診療において、薬剤師が抗 HIV 薬の投与開始および変更前後に面談を行うことは、患者ニーズに即したものであり、医師の負担軽減、医療の質の向上に寄与することが示された。

キーワード HIV 感染症，外来，抗レトロウイルス療法，アンケート調査

国立病院機構大阪医療センター 薬剤部 1) 国立病院機構九州医療センター 薬剤部 2) 国立病院機構姫路医療センター 薬剤部 3) 国立病院機構大阪南医療センター 薬剤部 † 薬剤師  
著者連絡先：矢倉裕輝 国立病院機構大阪医療センター 薬剤部 〒540-0006 大阪府大阪市中央区法円坂21-1-4  
e-mail: hiyagura@onh.go.jp

(平成29年3月9日受付，平成29年11月17日受理)

A Questionnaire Survey on the Effects of Intervention by Pharmacists on the Initiation and Alteration of Anti-HIV Agents in Outpatient of HIV Infection

Hiroki Yagura, Yuki Ohishi, Sayaka Morimoto, Kosuke Tomishima, Hiroyuki Kushida, Munehiro Yoshino, Rumi Sako, Toshiyuki Doi, Toshinobu Hayashi, Kazuhiro Yamawaki, Takashi Nishino and Kunio Yamazaki, NHO Osaka National Hospital, 1) NHO Kyushu Medical Center, 2) NHO Himeji Medical Center, 3) NHO Osaka-minami Medical Center

(Received Mar. 9, 2017, Accepted Nov. 17, 2017)

Key Words: HIV infection, outpatient, anti-retroviral therapy, questionnaire survey

表1 アンケート内容の概要

1. 患者背景について
・年齢・性別
・現在服薬を行っている抗HIV薬
・薬剤師との面談理由（治療開始、薬剤変更の別）
2. 1.の設問で治療開始と回答した患者を対象とした設問
・薬剤師との面談時期
・面談時間
・面談内容と役立った内容の詳細
3. 1.の設問で薬剤変更と回答した患者を対象とした設問
・面談内容と役立った内容の詳細
4. 薬剤師との面談の必要性について
・薬剤師面談の必要の有無
・希望する面談時期
・薬剤師に聞きたい事項
・薬剤師との面談による受診全体への影響および変化の有無について

## 緒言

本邦における Human immunodeficiency virus (HIV) 感染症患者の報告数は累計2万5千人を突破し、ここ数年は毎年1,500人程度の新規感染者が報告されている（エイズ動向委員会報告；<http://api-net.jfap.or.jp/status/index.html>）。HIV 感染症治療は、抗レトロウイルス療法（Anti-Retroviral Therapy: ART）の確立により、継続した服薬を行って、低下した免疫の再構築、持続的な HIV の増殖を抑制することで、長期予後が可能となった<sup>1)</sup>。しかしながら、治療成功のためには100%に近い服薬が求められる上に<sup>2)</sup>、中途半端な服薬は早期に HIV の薬剤耐性を誘導する。そのため、患者の服薬アドヒアランスの維持が治療成功の鍵であり、継続服薬に関連するストレスを最小限にとどめるための薬剤選択が重要となる。また、ART の処方決定に至るまでのプロセスには、患者の身体的、精神的状態に加え、継続服薬を行う上での患者のライフスタイルに即した服薬条件等、クリアしなければならない問題が数多くある。そのため、患者に各専門職種が関わり、職種間で情報を共有し、協力を行いながら、患者をサポートするチーム医療が重要となる。

HIV 感染症に対する外来チーム医療において、薬剤師が行う服薬支援の目的はアドヒアランスの維持、ART の有効性および安全性の確保を図るために、服薬に関する適切な情報提供および指導を行うことである。とくに、抗 HIV 薬の投与開始時およ

び薬剤変更前後は、用法、用量および副作用に関する情報提供や薬剤間相互作用の確認等、薬剤師が果たすべき役割が重要となる。

今回、ART 開始時および薬剤変更前後における薬剤師の介入が、患者の ART およびチーム医療に対する意識と服薬アドヒアランスの維持に寄与することを明らかにすることを目的としてアンケート調査を行った。

## 対象・方法

平成26年11月から平成28年3月までに国立病院機構大阪医療センターまたは九州医療センター感染症内科を受診し、HIV 感染症で外来通院している患者で、本調査の説明を行う3カ月以内に抗 HIV 薬の投薬が開始もしくは薬剤の変更がなされ、本調査の参加に同意した者を対象とした。

対象者に患者用説明文書を用い説明した上で、患者用説明文書とアンケート用紙を配布した。調査に同意した患者は、調査用紙の調査項目を記入し、患者の住所、氏名等は記載せず、感染症内科外来に設置した回収ボックスへ投函することとした。アンケート内容の概要を表1に示す。なお、本研究の実施にあたり大阪医療センターおよび九州医療センターの受託研究審査委員会に研究実施の承認を得ている。各設問に対する回答は、用意された選択肢から回答を選択する形式とし、一部自由記載の項目を設けた。なお、本研究は平成27年度厚生労働科学研究費補助

表2 面談理由別の年齢構成

面談理由	ART導入のため	薬剤変更のため
n	48	72
20歳代	5 (10%)	6 (8%)
30歳代	13 (27%)	18 (25%)
40歳代	19 (40%)	32 (45%)
50歳代	9 (19%)	11 (15%)
60歳以上	2 (4%)	5 (7%)

金エイズ対策研究事業「HIV感染症の医療体制の整備に関する研究」(研究代表者：横幕能行，研究分担者：吉野宗宏)の一環として実施した。

## 結 果

### 1. アンケートの回収率と回答者の概要について

アンケート配布は122人に行い，回収枚数は120枚であった(回収率98.4%)。

性別は男性100名，女性7名，未記載13名であった。面談理由別の年齢構成を表2に示す。面談理由はART導入のための48例，薬剤変更のための72名であった。回答者の年齢構成はいずれの面談理由においても40歳代が最も多く，次いで30歳代が多かった。

### 2. 薬剤師との面談について

#### 1) 初回治療時の面談時期および面談時間について

初回面談の時期については，「服薬を開始することは決まっていたが，どのレジメンにするか迷っていた」が24例(50%)，次いで「開始薬剤は決まっていたが薬剤の詳細について聞く時」が22例(46%)，「服薬を開始するかどうか迷っていた時」が2例(4%)であった。面談時間は15-30分が55%と最も多く，15分以内26%，30-45分17%，60分以上2%と続いた。面談時間については93%において適切であったとの回答であった。

#### 2) 薬剤師との面談について

薬剤師との面談について，「大変役に立った」は68例(57%)，「役に立った」は44例(36%)，「どちらでもない」7例(6%)，「あまり役立たなかった」が1例(1%)であり，ほとんどの症例において役立ったとの回答を得た。役立った説明内容を図1に示す，初回症例では「服薬の必要性」が最も多く

(58%)，次いで「飲み忘れと耐性獲得」および「飲み忘れた時の対応」(54%)が続いた。変更症例では「変更前の薬剤との違い」(71%)が最も多く，次いで「副作用」(67%)が続いた。

### 3. 薬剤師との関わりについて

薬剤師との面談の必要性について，「必要だと思う」は97例，「まあ必要だと思う」は21例，「どちらでもない」および「あまり思わない」が各1例であった。面談の時期については変更時が最も多く(68%)，開始時(51%)，相談事がある時(48%)，受診時(13%)が続いた。

薬剤師への質問事項については，副作用が最も多く，初回例は79%，変更例は88%であった。次いで「相互作用」であり，初回例は74%，変更例は61%であった(図2)。

### 4. 薬剤師との面談による診療全体への変化について

有効回答の73%において，変化があったとの回答であった。変化の内容については，「服薬に対する不安が軽くなった」が最も多く(79%)，「医師に副作用や相互作用に関する質問をすることが減った」(52%)が続いた(図3)。

## 考 察

外来 HIV 診療での薬剤師との面談は必要との回答がほとんどであったことから，外来 HIV 診療における薬剤師の患者面談の必要性は患者ニーズからも示された。また，外来診療において薬剤師の職能が薬剤の開始，変更時が最も発揮される時期と考え，今回のアンケート調査を行ったが，得られた回答から患者が薬剤師面談を望む時期とも合致することが示された。

薬剤師による ART 開始前の服薬支援は，患者が治療開始の意思決定を行う上で生じる葛藤を軽減するとの報告がなされており<sup>3)</sup>，本調査の初回治療開始前の患者を対象とした役立った内容に関する設問に対する回答から，「服薬の必要性」，「飲み忘れと耐性獲得」に関する理解，「飲み忘れた時の対応」について患者へ説明を行い，患者が把握，理解することが，葛藤を軽減する具体的な内容である可能性が示唆された。

また，薬剤師へ行きたい質問事項については，初

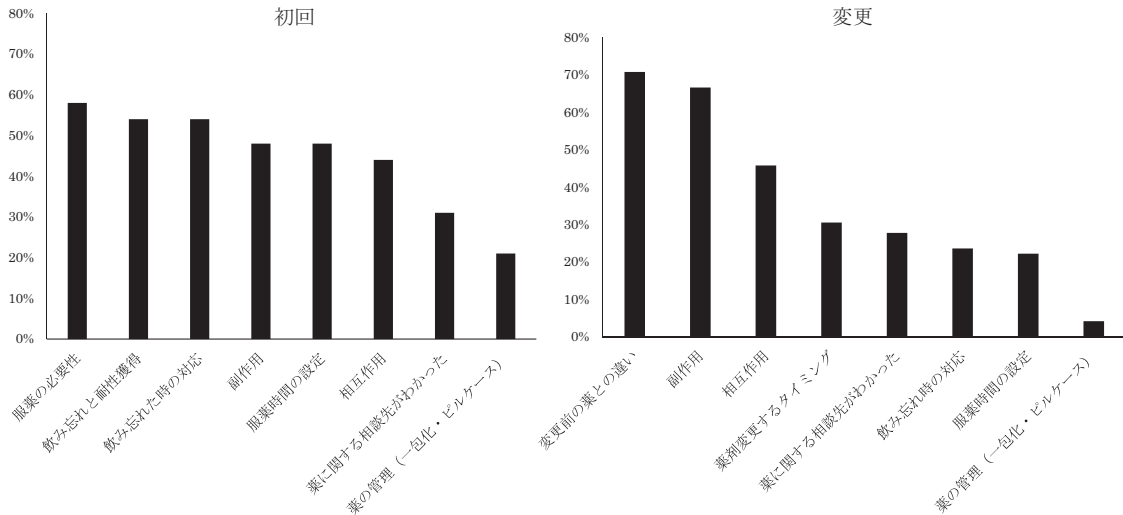


図1 薬剤師との面談で役立った内容

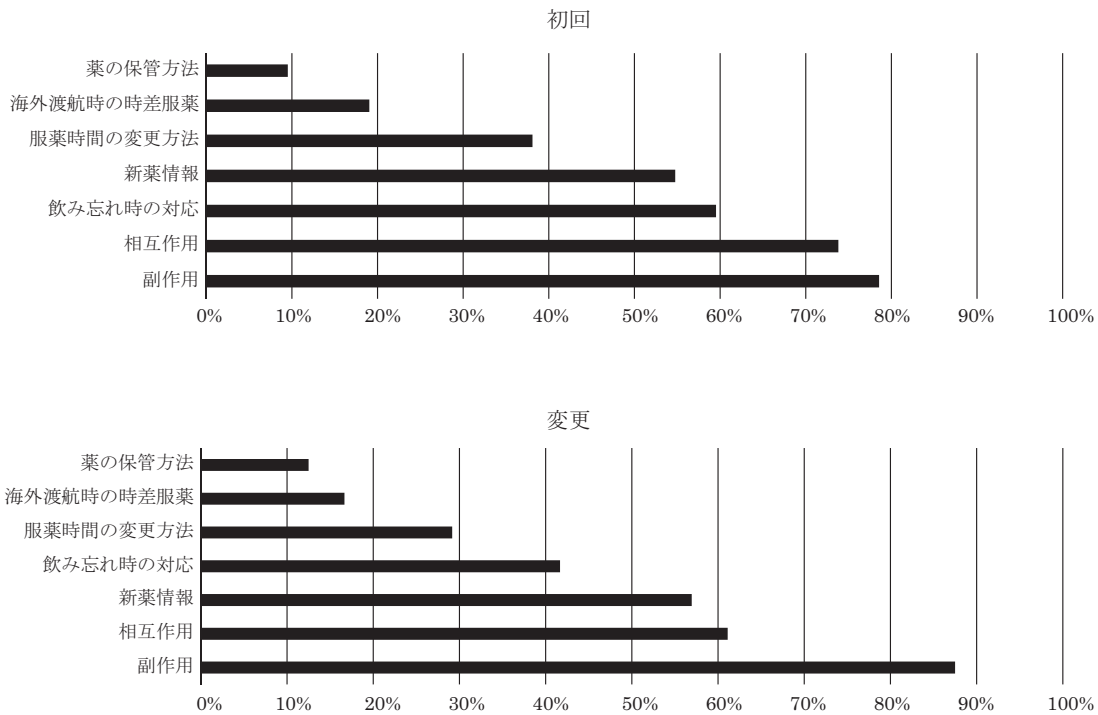


図2 薬剤師への質問事項

回、変更対象ともに「副作用」が最も多く、次いで「薬物間相互作用」とする回答が続いた。薬物間相互作用の回答が多かった要因として、抗 HIV 薬はチトクロム P450 が関連する薬剤が非常に多く、薬剤によって基質、誘導、阻害、性質、作用が異なり、薬剤個々の特性に応じた相互作用の可能性を考慮する必要がある。さらに、医療用医薬品、OTC 医薬品ばかりでなく、サプリメントや「いわゆる健康食品」との相互作用についても問題となることもあるため、服薬が長期にわたる抗 HIV 薬では相互作用

に関するニーズが高くなるものと考えられた。医療者を対象としたアンケート報告において、医師の回答から、薬剤師の「薬物間相互作用」への介入は、医療の質の向上と関連しているとしており<sup>4)</sup>、薬物間相互作用への薬剤師の介入は、HIV 診療において他職種および患者に示すことができる大きな「職能」の一つであることが示された。

また、同報告において医師が薬剤師の介入に対して感じている、「質の向上」、「診察・面談時間短縮」および「信頼関係構築」への貢献は本検討の結果か

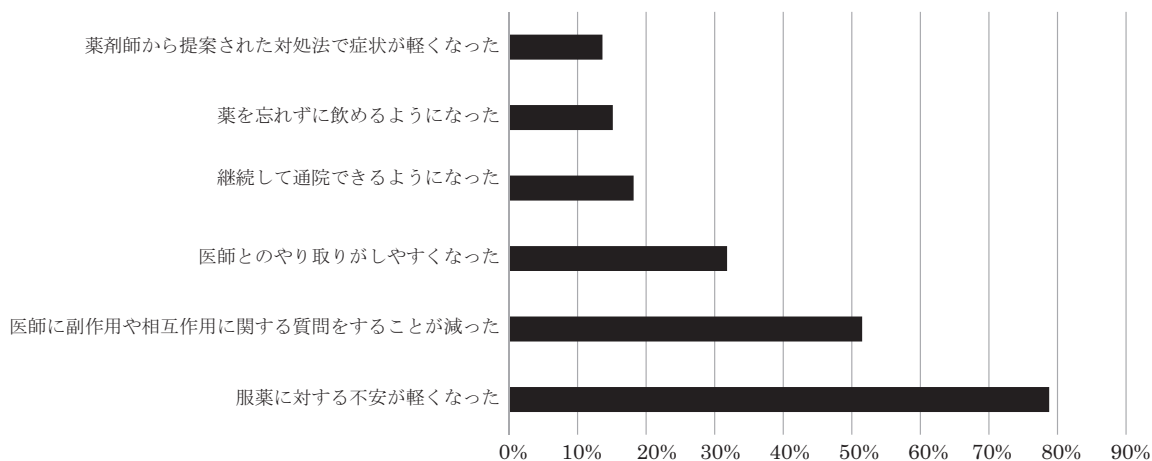


図3 薬剤師面談による外来診療への変化

ら、患者自身も感じていることが示された。

HIV 感染症患者は比較的若年層が多く、疾患の告知範囲が狭い患者も多いため、日常生活の時間の合間をぬって受診するケースも少なくない。そのため、受診全体を通して時間の制約が生じることが多いことから、より効率的な診療および診療支援が求められる。その中で、各職種がそれぞれの役割を理解し、チーム医療を行うことで有効かつ効率的な患者支援を継続して行うことが可能であるものと考えられた。

本調査結果から、外来 HIV 診療において、薬剤師が抗 HIV 薬の投与開始および変更前後に面談を行うことは、患者ニーズに即したものであり、医師の負担軽減、医療の質の向上に寄与することが示された。

〈本論文は第70回国立病院総合医学会シンポジウム「拡大する病院薬剤師業務 - 外来における薬剤師業務の現状と今後への課題-」において「外来 HIV 感染症診療での抗 HIV 薬の開始、変更時における薬剤師介入が患者へもたらす効果に関するアンケート調査」として発表した内容に加筆したものである。〉

著者の利益相反：本論文発表内容に関連して申告なし。

[文献]

- 1) Palella FJ Jr, Delaney KM, Moorman AC et al. Declining morbidity and mortality among patients with advanced human immunodeficiency virus infection, HIV Outpatient Study Investigators, N Engl J Med 1998 ; 338 : 853-60.
- 2) Paterson DL, Swindells S, Mohr J et al. Adherence to protease inhibitor therapy and outcomes in patients with HIV infection, Ann Intern Med 2000 ; 133 : 21-30.
- 3) 川口 崇, 関根祐介, 東加奈子ほか. 患者の治療選択における意思決定の葛藤を指標とした薬剤師の服薬カウンセリング効果の定量的評価法 - HIV 感染症患者を対象とした解析 -. 医療薬学 2013 ; 39 : 689-99.
- 4) 國本雄介, 吉野宗宏, 大石裕樹ほか. HIV 感染症診療における薬剤師介入が医療者側へもたらす効果に関する実態調査 - エイズ治療ブロック拠点病院および ACC における検討 -. 医療薬学 2014 ; 40 : 471-9.